十六の話

司馬遼太郎

十六の話

司馬遼太郎

中央公論社

十六の話

©一九九三　検印廃止

一九九三年一〇月一〇日初版印刷
一九九三年一〇月二〇日初版発行

著　者　司馬遼太郎
発行者　嶋中鵬二

印刷　精興社
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替 東京二-三四

Printed in Japan
ISBN4-12-002251-X

十六の話　目次

文学から見た日本歴史 7
開高健への弔辞 33
アラベスク
—井筒俊彦氏を悼む 45
〝古代史〟と身辺雑話 65
華厳をめぐる話 81
叡山美術の展開
—不動明王にふれつつ 119
山片蟠桃のこと 133
幕末における近代思想 153
ある情熱 157
咸臨丸誕生の地 164

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大阪の原形
—日本におけるもっとも市民的な都市 171
訴えるべき相手がないまま 229
樹木と人 257
なによりも国語 283
洪庵のたいまつ 295
二十一世紀に生きる君たちへ 303
あとがき 311
索引 318

カバー

「不動明王二童子像」（青不動）　迦楼羅炎光背部分
（京都市・青蓮院蔵）

十六の話

文学から見た日本歴史

私は、この壇上に立ってから、大きな失敗を犯したことに気づきました。この講演の演題についてです。

"Japanese History from Viewpoint of Literature"

なんとおそろしいテーマでしょう。私は、自分自身が小説を書いていながら、日本文学については、ほとんど知らないのです。

たとえば、十一世紀の『源氏物語』については、原文を一度だけ読んだことがあります。しかし偉大なアーサー・ウェイリー（Arthur D. Waley　一八八九～一九六六）博士のようなすぐれた感受性をもっていないために、さほどに面白い作品とは思いませんでした。

もう一つ、小さなエピソードがあります。ロンドンに来るのは、こんどが二度目です。最初は

一九七二年でありました。英国のかつての巨大ビジネス時に造形された重厚な首都のなかに四日間いました。ある日、自分の滞在に変化をあたえるために、どこかへゆきたいと思いました。そこで、このケンブリッジにやってきたのです。

われながらピクニックの目標としてはすばらしい選択だったと思いました。象牙でできているような美しい中世風の建物と、芝生、そのなかを流れている小川、このすばらしいキャンパスを見たとき、本来の大学とは、外から見ただけで、巨大な精神を感じさせるものだとすれば、この大学こそそうだと思いました。日本に帰ってから、そのことを私の友人に言いますと、彼は〝残念ながら君の賞讃はすこしまちがっている。オックスフォードこそ君のその表現に値いする大学だ〟といいました。彼はむろん日本人で、若いころオックスフォードに留学していたのです。

そこで大いそぎで申しあげねばなりませんが、私はこのケンブリッジのほか、英国における大学は一つも知りません。たとえば、日本の明治維新に若い外交官として特異な影響をあたえたサー・アーネスト・サトー（Sir Ernest M. Satow　一八四三～一九二九）が学んだロンドンのユニヴァーシティー・カレッジを知りませんし、おなじく明治維新のころ、日本の医学に刺激をあたえ、かつ病者に対して親切だった医師、ウィリアム・ウィリス（William Willis　一八三七～九四）の学んだエディンバラ大学も知りません。

ともかくも、最初にこの大学のキャンパスを歩いたとき、この大学が生んだたくさんの知性た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちのことを思うだけで、私の頭は割れそうになるほど、刺激的でありました。とくに、アーサー・ウェイリー博士のことを考えました。かれは、現代日本語を知ることなく、また日本に一度も行ったことがなく、十一世紀の日本語を日本人以上に理解し、無数のコトバが発信してくる信号をすばらしい受信機にうけとめて、『源氏物語』を再構築した人です。そのことを思ったとき、その知性と想像力に感動しつつも、人間というものはなんと偉大な可能性をもつものかということを思い、勇気づけられる思いがしました。キャンパスの中を歩くだけで、異国人に勇気を与えるとは、なんと魅力的な大学でしょう。

もう一つエピソードを申しあげます。

この大学で、若いころ講師をしたことがあるドナルド・キーン（Donald Keene　一九二二～）博士は、私の古い友人であります。

私が持っている芭蕉（一六四四～九四）に関する美学的解釈のいくつかは、キーン博士の著作から刺激されたものであります。このことは、外国の言語や文学その他を研究するということは、研究者にとって単に対象国の文化を理解するだけでなく、しばしば対象国の美学的解釈に好もしい変化をあたえる作用があるということでのよき例になるかと思います。

もう一つエピソードを思いだしました。

これはこの大学の日本語科の出身のひとでありますが、無名の学者であります。ロジャー・メイチン（Roger Machin）といいます。現在、日本に住み、大学で英語を教えています。二十年前、

かれはまだ二十五歳の青年だったのですが、京都大学の大学院に入りました。そのころ、彼は私の家にたずねてきてくれたのです。真面目で、冗談をいうことのきらいな性格の青年でした。

「日本にきたのは、どういう目的ですか」

と私が問いますと、

「日本の国語学を伸ばしに――進歩させに――きたのです」

とかれが答えたのです。

私は、青空を見たときのようないい気持で、大笑いしました。むろん、かれのこのことばが、気に入りました。さすがに、かつて七つの海を支配した国からきた青年だけのことはあると思いました。

むろん私がそのとき、十九世紀の日本で活躍した偉大な言語学者バジィル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain　一八五〇～一九三五）先生を思いだしたのは、いうまでもありません。ポーツマスのうまれのこの学問的天才は、残念ながらケンブリッジの出身ではありません。独学で自分の学問をつくりあげた人でした。一八七三（明治六）年明治維新から五年のち、二十三歳のときに日本にきて、日本語を研究し、ながい期間東京大学で言語学を教えました。日本語を言語学の立場から研究した最初の人で、日本で国語学とよんでいる言語学の祖先は、チェンバレン先生であります。チェンバレン先生のことを思うと、若きロジャー・メイチン君の大いなる志も、当然のことだと思ったのです。

残念なことに、ロジャー・メイチン君は、その点での志を遂げることができませんでしたが、現在、愛知県の大学で、すばらしい教師として、学生たちの尊敬をあつめています。かれは冬になると、いまでも、ケンブリッジのスクール・カラーのマフラーをくびにまいて、私の家にやって参ります。かれは学生時代から使っているマフラーをよく手入れして、いまも新品同然なのです。この深い赤色のマフラーは、伝統ある英国の毛織物の品質のよさをあらわすとともに、かれの愛校心のつよさをもあらわしています。

この講演は、エピソードの連続になりそうです。

さきに、ドナルド・キーン博士のことを申しました。

この人と私は、ある出版社の依頼で、十四年前（一九七一年）、対談をしたことがあります。対談は、あとで本になりました。いまでも継続して売れている本で『日本人と日本文化』（中央公論社）という題の本です。題名に、文学という言葉は入っておりません。そのことについて、私は右の本の〝まえがき〟に書きましたが、じつは、あらかじめ、キーンさんに頼んだのです。

「日本文学の話は、話題として持ちこまないで下さい。私はほとんど知るところがありませんから」

そういう私が、いまここで「文学から見た日本歴史」という話をしようとしているのです。おそらく文学という Viewpoint が抜けるでしょう。

以上は、自己紹介のつもりで話しました。

ああ、一つ、言いわすれたことがあります。私は、イギリスの大衆紙に評判のわるい第二次大戦の日本軍の兵士だったということです。ただし二年間、いちども戦場に出ませんでした。私は、日本陸軍のとっときの戦車に乗っていました。日本陸軍はきっと私を吝(おし)んだのではなく、その戦車が敵にこわされることを吝んだのにちがいありません。

戦いがおわったとき、当時二十二歳だった私は、

「なぜこんなにバカなことをする国にうまれたのだろう」

と思いました。

さらに、こうも思ったのです。

「むかしは、たとえば明治時代は、あるいは江戸時代は、さらにはそれ以前は、こんなバカなことをする国ではなかったにちがいない」

そのことを検証することに、半生をついやしました。

というわけで、私の原点は、一九四五年にあります。従って、作家としての私は、〝人間とは何か〟を追求するよりも前に〝日本人とは何か〟ということを考えつづけることで、三十年をついやしました。このため、私は、旅客機で喩えますと、ドメスティック・エアラインで、インターナショナル・エアラインではありません。古代インド人が信じていたように、もし輪廻(りんね)というも

のがあるなら、ぜひ来世は〝人間とは何か〟について書いてみたいと思います。

いっそ、大きく遠い話から致しましょう。

日本は、孤島から出発して、いまもそうである、という平凡な地理的規定が、世界史における日本史のおもしろさの基本的なポイントだろうと思います。

英国もそうだ、といわれるかもしれませんが、英国と大陸をへだてているドーバー海峡が三、四十キロであるとすれば、ユーラシア大陸の半島の一つである朝鮮半島と日本の間には、島が一つあるとはいえ、その五倍ないし六倍もあるのです。中国大陸の東端の半島から日本までは、ドーバー海峡の二十倍以上もあります。まさしく日本列島は、大陸の文明から孤立した島々のあつまりであります。

このため、日本列島は、太古以来、文明という光源からみれば、紀元前三〇〇年ぐらいに、稲を持ったボート・ピープルがやってくるまで、闇の中にいました。この闇の時代のことを、日本では、土器の模様からとったネーミングとして、

「縄文時代」

といいます。旧石器時代につづく時代で、この採集生活の時代が八千年もつづいたというのは、驚くべきことです。

文明は、交流によってうまれます。他の文化からの影響をうけずにいると、人類はいつまでも

進歩しないということを雄弁に物語っています。縄文の時代のある時期の人口はほぼ三十万程度だったろうと推定されています。

その時代の言語は、むろんわかりません。

しかし、いまの私どもが話している日本語の言語発声の生理は、その時代から遺伝を継承しているだろうと私は推測しています。

ご存じのように、日本語は母音の多い言葉であります。子音のつぎにはかならず母音がきます。そして単語の最後は必ず母音でおわります。このことに関するかぎり、私どもの日本語は、ポリネシア人やインドネシア人とおなじように、太平洋民族の言語の生理に似ています。ほとんど母音だけで、一つの言語を、たとえばハワイの人達は話します。たとえば、そよ風がやさしくなることを、ハワイ語ではオアヘアヘ(oaheahe)といったりしますが、ほとんど母音です。『源氏物語』の主人公光源氏の妻の名は、葵の上です。古い時代の発音では Afuhi-no-uhe というように、いくつかの子音がありますが、いまの私どもの発音では、Aoi-no-ue というふうに、子音は一個しかありません。なにやら南太平洋の島々のことばをきいているようです。

こういう言語の生理は、遠い縄文時代から相続しているように思われます。

これに対し、となりの国の朝鮮語は、じつに子音の活動の活発なことばで、私は一時期、朝鮮語を習おうとしましたが、私のように語学の才能のない者には不可能でした。とくに、朝鮮語では、単語の最後に子音がくることが多いのです。これは日本人にとって、生理的に苦痛です。む

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com